

介護老人保健施設で長時間労働・入所者確保の厳しいノルマ・理事長からのハラスメントなどで、わずか1年2カ月足らずでうつ病を発症した看護師の寶田都子さん（67歳）。7年半余り、病を抱えて労災の認定を求め、たたかっています。（編集部 井上）

■24時間365日拘束

寶田さんは度重なる要請を受け2012年1月、介護老人保健施設「明けの星」の看護師長として入社します。

「38年余り看護師の経験を活かした私でも、経験したことのない過酷な労働環境が私を待っていました」。

在籍した1年2カ月の間に15人の看護師のうち13人が退職、12人を新規に採用。その12人のうち2人が3カ月以上の病気欠勤。看護師不足が常態化し、現場は医療過誤を起こしかねない窮状にありました。

入社時、理事長から臨床業務はせず、管理・教育業務をするという依頼を受けましたが、師長といえども新人で、施設設備・入所者の状態など多くのことを短期間で習得するため、当初から臨床業務を行いました。臨床の要の看護主任の不在・人手不足の中、現場の業務は増加の一

途を辿り、その上に管理・教育業務や訪問面接など、数えきれない業務を一人で背負い、それに多くの雑務が次々入り尋常ではない仕事量を抱えていました。

昼休みもなく、毎日のように残業し、休日も出勤。持ち帰り業務も増えていました。

入社から1年2カ月連続で月100時間を超える時間外労働を強いられ、平均時間外労働は130時間9分に上ります。

携帯電話には夜間・休日を問わず連絡が入り、出勤を余儀なくされることも多く、24時間365日心身が休まらず、夫・哲夫さんから「身体を壊す、もう

辞める」「死んでしまおう」と幾度も言われ続けました。

「この頃の私の精神状態は夫の言葉を受け入れる余裕はなく、走り続けている自分の限界を自覚することさえ困難な状態でした」。

■ノルマ未達成と叱責

「理事長から入社時に『入所定員100名中95名以上の確保、それを割れば責任を取ってもらう』というノルマを課せられ、激務の中、その重責は一時も頭を離れませんでした」。

入社3カ月後、理事長が当時の施設長を即日解雇し、施設内の医療・看護体制が崩れ、入所者の安全・安心が守れない状況に陥っていました。寶田さんは、状況改善のため理事長に何度もかけあう内に、次第に疎まれ、

無視をされ、業務連絡も取れず、関係は悪化していききました。

そして、その年の12月の幹部会議で「入所者95名未達成」に関して、すさまじい叱責・糾弾を受ける事態が起きます。

「理事長から『責任者立てー』と10数人の出席者の前で立たされ、指をさされ『おまえ仕事をしていないだろう。おまえの責任だ。赤字だ』と30分以上に亘り罵倒され続けます。他の出席者は額が机につく位下を向き、身動き一つせず、声も出せない異様な状況でした」。

寶田さんは理不尽さへの憤りから震えや動悸・涙もあふれ、立っているのがやっとという状態でした。

「閉会后、錯乱状態に陥り、夫に電話した記憶がわずかにありますが、どうやって帰宅した

かの記憶もありません」。

その夜は恐怖感で一睡もできず、翌日は出勤できず、その後、何とか仕事を続けますが、不眠の上に理事長と顔を合わせるど、心身の異変が続ききました。

年が明けて13年3月7日、理事長に呼び出され、再び一方的に罵倒され、解雇通告を受けます。「1年余り苦勞し、看護師が定着し育ち始め、入所者確保の目途もたった」ことを話しましたが、一方的に話を打ち切られました。

この日を境に、体調はさらに悪化し、3月13日に病院を受診。医師から「急性ストレス反応」の診断を受け休職を指示されますが、診断書の受け取りを拒否され、やむなく仕事を継続。しかし、3月18日には全く起き

私の誇り、取り戻す



香川・休業補償給付不支給処分
取り消し請求事件

たからだ みやこ
原告 寶田都子さん

泣き寝入りしない
仕事に行けなくなつてから、うつ病は悪化の一途を辿り、生きていることも危うい状態に陥ります。哲夫さんに付き添われ高松労基署へ労災申請をおこなった際には職員から「あなた、生きてますよね。生きていて労災申請は図々しい」などの暴言を浴びせられ、労災は不支給決定。その後の審査請求、再審査請求のいずれも棄却されました。

17年1月、寶田さんは休業補償不支給処分の取り消しを求め、高松地裁に提訴しました。

「労基署などの調査報告書に、啞然としました。長時間労働、パワハラなどの事実とは程遠い捻じ曲げられた内容が書き記されており、このままでは悔いが残ると思いました。事実を明らかにし、長年築き上げてきた職業人としての誇りを取り戻す。同じ思いをする人を2度と出さないという思いで提訴に踏み切りました」。



地裁判決日に裁判所に向かって行進

■控訴審をたたかう

今年6月16日、高松地裁は不当にも寶田さんの請求を棄却しました。判決は長時間労働を示す寶田さんが書いていた自宅カレンダーの帰宅時間などの書き込みについて信用性はなく、タイムカードの時間外労働分のみしか認定せず、パワハラ行為を否定する施設側関係者の証言を全面的に採用し、厚生労働省の「心理的負荷による精神障害の認定基準」に照らして、心理的負荷が、精神障害を発症させるほど強度のものではなかったとしました。

病を抱えた心身が悲鳴を上げる中、3年5カ月に及ぶ必死のたたかいに臨んだ結果が不当判決。控訴期限が迫る中、寶田さんは絶望の中で悩みました。しかし、支援者からの温かい言葉を支えに控訴を決意しました。

「真実がつぶされるのを黙っていることはできません。もう一度全国からさらなる大きな支援をよろしく願います。併せてぜひ、高裁宛ての署名にご協力をお願いします」

控訴審第1回口頭弁論は11月4日に高松高裁で開かれます。

〈署名問合せ先〉「寶田都子さんのうつ病労災裁判を支援する香川の会」〒760-0007 3 香川県高松市栗林町2-14-39 (香川県医療労働組合連合会内) ☎087-(862) 6657 FAX: 087-(862) 6699

ホームページ URL: <https://akenohoshi-rou sai.com/>

(検索キーワード) 「明けの星」寶田都子